

Newsletter

AUG. 1997

会長就任にあたって

上尾庄一郎

去る五月十八日の京都大学学士山岳会（AAEC）理事会で、今期で退任される高村泰雄会長の後任会長として私が、酒井敏明、木村雅昭、両副会長の後任には田中二郎、森本陸世の両氏が選任され、同時に、斎藤惇生、左右田健次、岩坪五郎、能田成の諸氏が理事を退任され、新井浩、原田道雄、上田豊、山田和人、清水浩の諸氏が新たに理事に選任されました。続いて開催された総会でこれら新人事は承認されました。このことは昨年度の事業報告および今年度の事業計画とともに、全会員に通知されております。



この新人事、特に今まで京大教授が就任するのが伝統であったAAEC会長に民間人である私になることに対しては、意外に思われた方が多くおられた事でしょう。実のところ私自身も来年二月には満六〇歳となることを理由に、今期で理事を退任したい旨申し入れていたところが、一転して高村前会長の強力な指導力で、二名の副会長とのセツトで会長就任を受諾しなければならなくなったのが現実です。

事情はどうであれ、選ばれた以上は新任および継続役員の方々と力を合わせ、会員の意見をくみ上げながらAAECの運営にあたる所存であります。会員各位の強力なサポートをお願いいたします。

この機会に、AAECのあり方に対する私の考えを少し述べさせていただき、今後の論議のたたき台にしたいと思っております。

七〇年に近いAAECの歴史を通じ、特に一九五〇年代以後のAAECを、大学を基盤とする他の山岳会から際立って特徴付けている事項を挙げると、以下のようになります。

(一) ヒマラヤの未登峰の登頂を目標に掲げている事

(二) 会長には登山の実績のある（京都大学）教授が就任する事

(三) 会員は（京都大学）関係者に限定しない事

(四) 社団法人である事

(五) まとまった額の遠征基金を持つ事

(六) 充実した学術登山文献センターを持つ事

このうち(二)から(六)までの事項は、全て(一)の目標達成のために有用なシステムとして整備されてきた事項です。即ち、(二)はヒマラヤ遠征

を実行するにあたり、関係省庁や京大内での折衝、遠征資金の民間企業からの募金、隊員が長期間大学あるいは職場から離れることの許可取得などで有効なことは、経験的に証明されています。(三)はいうまでもなく(一)の目標達成のためより広いベースから有為な人材をリクルート出来ます。(四)については、国を代表するスポーツ団体（例えば日本山岳会）でなければ取得するのが困難な社団法人資格を多大の努力をして取得し、さらにこれを維持するために毎年かなりの労力と資金を投じてきたのは、(二)の場合と同様(二)のためには明らかに有用であったからです。(五)はヤルンカン遠征以後設定されたものですが、その後の遠征隊派遣事業において、登山許可取得のための要員派遣や予備偵察隊の派遣に役立つなど、その効用は測りしれないものがあります。更に若手隊員に対する隊

員負担金への補助金としても有効に活用されてきました。(一六)は登山計画の立案にあたって活用されてきたのはいまでもありませんが、我が国では数少ない充実した登山文献センターを持つ事は、(四)の社団法人資格を持つものと同じく、AACKのステイタス向上に役立ってきたと思われます。

ナムナニ遠征が成功裏に終結した頃だったと記憶しますが、最後まで残っていた中国領内とプータンの登るべき未登峰もほぼ登り尽くされたと思われた頃、会の目標が無くなったという理由でAACK解散論が話題にされた事がありました。その後あたかもこれに対する反論かのように、未登峰ではないが八千メートルより高いシシヤパンマ峰への医学学術隊、および七千メートルより低いが見事な山容と聖山としての威厳を持つ梅里雪山への登山隊が派遣されました。

医学学術隊は学術調査でもシシヤパンマ登山でも十分な成果を挙げましたが、ここで示された方向がAACKが以後進むべき道であるというコンセンサスは得られなかったと思われます。それとは対照的に、第一次梅里雪山登山隊は不成功に終わりましたが、計画そのものは会の内外から高い評価を得たので、AACK解散論は聞かれなくなりました。

AACKの目標はまだ無くなつてはいなかったわけです。

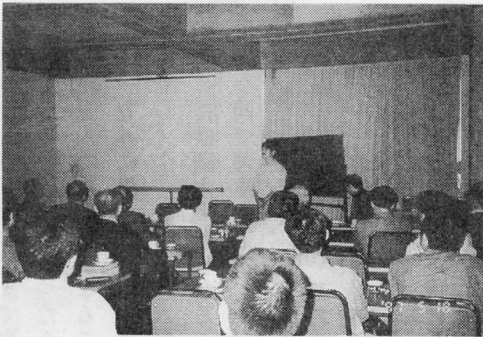
不幸にして、第二次梅里雪山登山隊は予期せぬ雪崩のため一七人の日中隊員の遭難という悲劇的な結果になりました。それから六年後の一九九六

年にいたり第三次梅里雪山登山隊を派遣することが出来ましたが、不本意な結果に終わりました。

第三次隊の活動状態を観察しますと、現在のAACKは梅里雪山クラスの山に登れるクライマーをも確保できなくなつてしまつたと、私には思われます。この理由としては、第二次隊の大量遭難による人材喪失と、その後の長期にわたるプランクによつて人材養成がなされていなかった事が挙げられますが、より根本的には若者の登山離れによる大学山岳部の凋落があり、伝統を誇る京大山岳部もこの例に漏れず部員も少なく、その登山活動も低調になつた事によるといえます。

かつては山岳部を始め、京大内での登山活動は盛んであるが、そこで活動した学生達も卒業後AACKに入会する者が少ない時期が続きました。しかしそのような時代でも、AACK未入会者だがヒマラヤ登山に興味を持ち参加実行する意思を持つ者は、計画が成立すれば入会し、隊員として活躍するケースが多々ありました。しかし今やそれも期待出来なくなつたわけです。

AACKの掲げるヒマラヤ未登峰の登頂という目標は、対象の山が無くなつたという理由ではなく、登攀要



員を確保出来ないという理由で達成出来なくなつたわけです。

今AACK解散論が出てもおかしくありませんが、もし会員の意見を求めるならば、会の掲げる目標の見直しで対応すべきとの意見が多数を占めると想像します。

しかしながら、私はその前にもう一度原点に戻り、若手登攀者の養成を積極的に行つてみるべきだと思います。具体的には京大山岳部にターゲットを絞り、五年以内に四、五名の要員を養成し、彼らの参加を得て残っているしかるべきヒマラヤ未登峰の登頂を試みる。その成績によりAACKの以後のポリシーを決定するということです。私の参加した一九六四年の京大山岳部アンナプルナ南峰(ガネツシュ)隊の経験では、登山歴四年未満の現役部員を中心にして、現在の標準でも困難なルートから登頂に成功しましたので、一世代前の事ではありますが、現在でも可能性があると思います。

この達成のためには、二〇歳前後の京大生の思考と行動様式を理解でき、場合によれば山行を共にするなど、彼らに影響力を発揮できる(多分年齢がより近い)会員の努力に期待します。幸い田中新副会長は山岳部長ですから、山岳部との関係を今までのようなドライ(クール)な関係から、私が山岳部員であつた頃の様なウェット(ウォーム)な関係にするのに努力してくれるでしょう。この場合、老朽化している京大笹ヶ峰ヒュッテの改築計画に協力する事も役立つのではないかと思います。

それでも結果が思わしくなければ、前述の(二)ヒマラヤ初登頂の看板は降ろす事になり、(三)から(六)項目も必要性が薄くなり、リストラの対象となりましょうが、私は登るべき山があるあいだは(二)の目標を掲げ続け、(二)をかえたのは早すぎたと反省する結果になることを希望しています。

以上に述べましたことをたたき台にして、各位の活発な意見交換がおこなわれる事を期待します。これにはAACK Newsletterが格好な舞台ですが、原田新任理事を中心に計画中のインターネットホームページのオープンが待たれます。

新・日本 オートルート

高尾文雄

大学を卒業してからも何とか山登りを続けているが、雪山は山スキーに専念することになっている。学生時代にヒュッテで教えられた山スキーだが、スキーが下手であり山スキーには行かなかった。そこでスキーの滑走技術の向上を目指し一生懸命ゲレンデ通いを始めた。一二月から二月まではゲレンデ通いをし、三月の半ばから五月終わ

まで山スキーに行くようにして、やっとどんな斜面でも滑れる自信がついた。

山スキーには学生時代に土地勘のある妙高方面が多いが、五月の連休は出来るだけ長いルートに行くようにしている。ここ数年一月にヨーロッパアルプスにゲレンデスキーに行っている。オートルートにも興味が出て、ルートを調べたり行った人に様子を聞いたりしている。ところで、山スキールート図集を見ると、日本オートルートとして立山、槍が出ています。立山をモンブラン、槍をマッターホルンに例えたのだろうが、ルート図集に載っているコースではスキーを使える範囲はかなり限られていて、大滑降と呼べる物は黒部五郎の下りと槍沢ぐらいで、これではただ長いだけで山スキーのルートとしての魅力に欠ける。

そこで、今回は地形図を穴のあくほど見て検討を重ね、スキーを最大限に使った新しい日本オートルートを自分たちで作ろうと言うことになった。一年では難しいと思い、上半、下半に分けて二年越しで挑むことにした。滑降のポイントは上半は御山谷、廊下沢、薬師沢、北ノ俣西斜面で、特に廊下沢は滑降記録は見あたらなかった。下半は、赤木沢、黒部五郎のカル、双六谷、蒲田川左俣、槍沢である。

上半：立山から北ノ俣(一九九六年)

メンバー 高尾文雄(マッコ) 田中博之

芝田之克 山森晴之(ボンタ)

五月二日 晴後曇 夜雨

九・三五 室堂出発 一〇・四〇 一ノ越着

一一・三〇 御山谷一八〇〇メートル

一四・一〇 刈安峠 一五・二三 五色への尾根の二一〇〇メートル地点(幕堂)

室堂から大勢の人達と一ノ越まで重荷を背負って上った。一ノ越からの滑りは雪が悪く前につんのめりそうになった。一八〇〇メートル地点まで滑り、右岸の尾根の一ノ越から見ると窓のように見える峠へ登り返す。二〇五六メートルの峠から中の谷へ滑り込む。デブリもなく快適に滑れた。中の谷から刈安峠までは急で、斜面の上部の雪面は亀裂が入っていて今にも崩れそうに見えた。刈安峠からの尾根はやせていてシールでは歩きづらい。二一〇〇メートルまで登りテントを張った。風が強くプロックを積んだ。

五月三日 快晴 風強し

六・一三 室堂出発

七・一〇 五色ヶ原東端

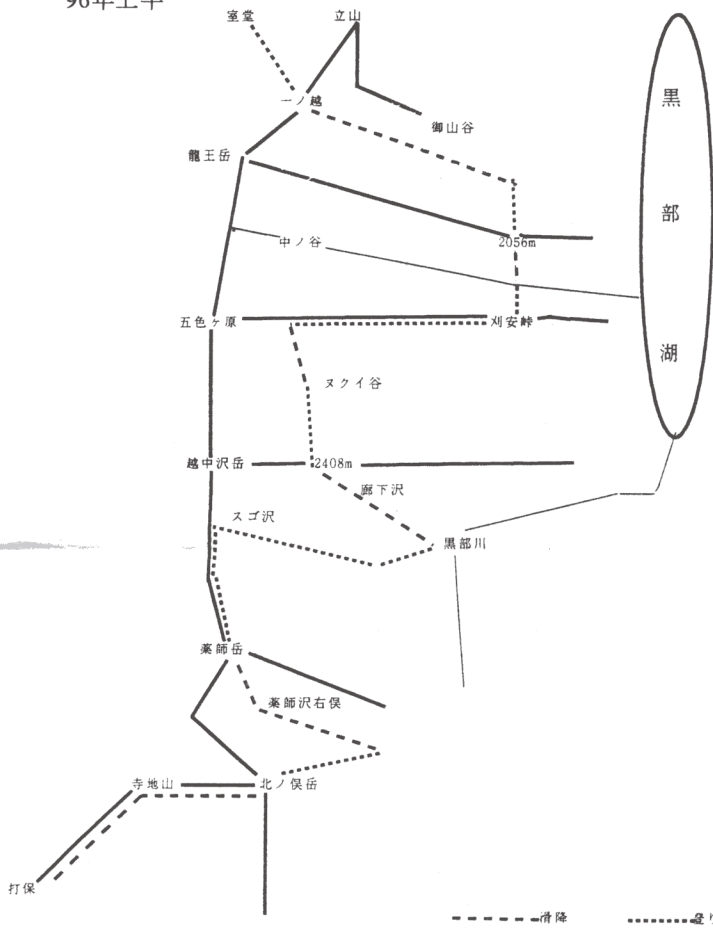
八・二〇 ヌクイ谷

一一・〇五 越中沢岳東峰(二四〇八メートル)

一二・三〇 黒部川出合

一三・一五 スゴ沢出合(幕堂)

快晴になった。雪面は堅くクラスとして、アイゼンをつけて登る。五色ヶ原の東端に着いたものの、堅すぎて滑れない。四〇分程時間待ちをして滑り出す。ヌクイ谷までは無木立の広い斜面で、傾斜もあり少々緊張したが快適な滑降であった。ヌクイ谷から登り返し、二四〇八メートルのピークのすぐ横にでて向こう側を覗き込むと、黒部川の出合まで一直線に見渡せた。そこから廊下沢へ滑り込んだ。上部は急であったが、広いカル状ですごく気持ちの良い滑りを楽しめた。扇の要のようになっているところまで滑ると、そこからU



字谷の様になっていて、左右からの落石が少し気になるが、一気に黒部川まで滑れた。黒部川は悠々と流れていた。左岸を進むが、スゴ沢の手前で行き詰まった。右岸へ崩れかけたスノーブリッジを渡って、スゴ沢の当面の中ノタル沢の出合いの台地で幕営した。

五月四日 晴後曇

六・〇〇 出発 八・〇五 主稜線

一三・四五 薬師岳

一五・三〇 薬師沢本流(幕営)

スゴ沢は出合い付近は両岸が迫っており、落石、ブロックが恐い。滝は埋まっています問題なし。二

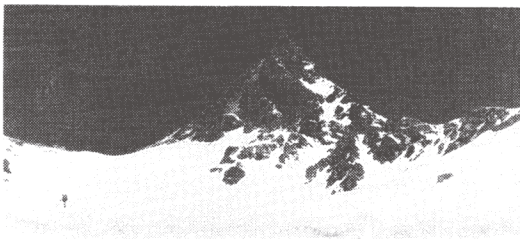
俣を左へ、そこから上は明るく開けていた。主稜線はさすがにトレースがあったが、人の姿は全く見えない。薬師までは巨大な雪庇の上をシールで登り、薬師からは薬師沢右俣を滑った。上部はクラストしていたが、広大なスロープを快調に滑走した。一本のシユプールもなかった。薬師沢の本流に近くなって、沢が割れだした。高巻きながら滑って薬師沢本流との出合いでテントを張った。

五月五日 雪後雨後雪

一二・四五 出発

一四・三五 薬師沢左俣左岸

尾根二四〇〇メートル(幕営)



朝から大雪が降り、出発を見合わせる。昼過ぎに小康状態になり、二四〇〇メートルまでテントを上げることになった。登るにつれ天気は冬型になり、気温も下がり本格的な吹雪となってきた。風を避け木陰にテントを張った。

五月六日 晴風強し

六・一五 出発 七・五三 北ノ俣岳

九・五〇 寺地山

一〇・四五 標高一五三四メートル

一二・二〇 林道(一二〇〇メートル)

スキーを脱ぐ

一三・二五 打保 無事終了

昨夜はかなりの雪が降り、五月と言っても非常に寒かった。朝になると、急速に天気は良くなり快晴になった。北ノ俣からの滑降はシユカプラとクラストが交互に出てきて、苦労させられた。新雪の下がプレーカブルクラストになっていた。風

が弱くなる所まで降りれば、快適な新雪滑降となった。寺地山まで登り返して再び滑るが、傾斜がなくて進まない。途中からはスピードも上がり、沢底まで一気に降りた。夏道通りに峠に登り返し、最後の急な斜面を沢通しに降りた。最後は雪がほとんどなくなっていたが、それでも雪を拾って粘りに粘ってスキーで降りた。五日間のトータルの獲得標高差は、五〇〇〇メートルであった。

下半：北ノ俣から槍（一九九七年）

メンバー 高尾文雄（マッコ） 加藤正一

前田浩之（ヒョーロク） 山森晴之（ボンタ）

五月一日 快晴

八・六〇 林道終点出発

九・一〇 有峰へのトンネル

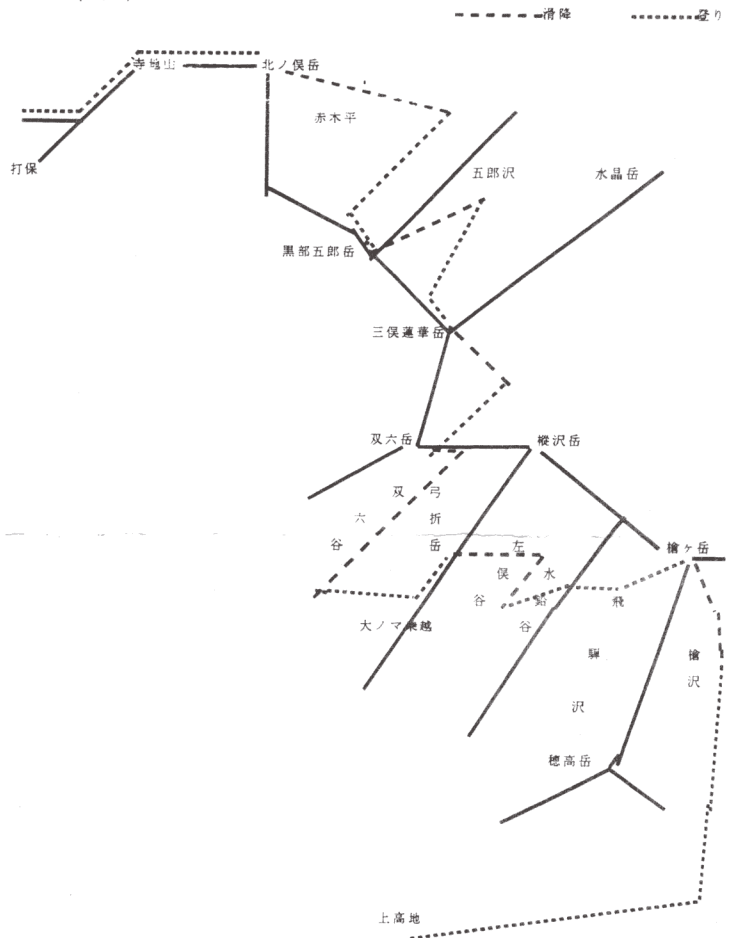
一三・〇〇 寺地山 一四・一五 避難小屋

一六・四五 北ノ俣岳 一七・三〇 赤木平

神岡鉄道終点の奥飛騨温泉口からタクシーで、有峰へ続くスーパール林道を行ける所まで入って貰う。雪が少なく打保からずいぶん上がって有峰に通じるトンネルの手前まで行けた。トンネルまで林道を歩き、脇から取り付いた。すぐに雪が出てきたのでシールを付けた。寺地山を越えて避難小屋までは樹林の中を進む。今年は雪はずいぶん少ないようだ。ザックは重く、木がじゃまでなかなか進まない。避難小屋からは急に開けてピッチが上がった。北ノ俣に着いたのは夕方になった。すぐに滑降に移ったが既に陽が陰り、雪面の表面が凍り出していた。すごいブレーカブルクラストの中をなんとか赤木平まで滑り、テントを張った。

五月二日 晴後曇

97年下半



五・四〇 出発

六・二〇 赤木沢標高二二〇〇メートル

一〇・〇〇 黒部五郎岳 一一・〇〇 五郎沢

一四・〇〇 三俣蓮華

一五・〇〇 縦沢源流標高二四五〇メートル

昨夜は冷え込み雪面は堅くクラストしている。赤木沢を黒部本流を目指して滑り降りた。赤木平からの滑降は非常に快適。傾斜は有るが、斜面は広く雪が良くエッジが利いた。沢に降りると至る所雪が割れていて、とても黒部本流まで滑れそうにない。高巻きを繰り返しながら滑り、標高二二〇〇メートルの所で右岸から入る沢を使って登

り返すことにした。ウマ沢との間の尾根に上がる。黒部五郎へ続く主稜線に出ると堅くクラストしていた。黒部五郎の頂上から滑降すると、カールは所々雪崩の後があり、出だしは少々緊張した。カールの中は雪が重かったが、快適な滑降を楽しめた。五郎沢の左俣に行き当たったところで、シールを付けて三俣蓮華に向けて登り直す。稜線を頂上まで登り、縦沢の上部に滑り込んだ。出だしは急で緊張したが、上部は雪も良く快適にターンできる。トラバースに移ったが途中雪崩れそうなので、斜面にぶち当たった。横切るのは危険なので、一人ずつまっすぐ滑り降りる。縦沢源流二四五〇メ

ートルの台地で泊まった。

五月三日 曇時々晴 夕方曇一時雨

五・〇〇 出発 六・一五 双六小屋

七・〇〇 双六沢二二五〇メートル

八・一〇 大ノマ乗越

九・一〇 弓折岳 一一・二〇 水鉛谷

今にも降り出しそうな曇り空の中を出発。主稜線の二六五〇メートルまで登り、双六小屋のすぐ上に出て、滑降を開始。気持ち良くクラストについて、朝一の滑降は非常に快適。双六小屋から双六沢を滑降するが、ブレイカブルクラストに変わり、大変苦労しながらの滑降となった。二一五〇メートルまで滑って大ノマ乗越まで登り返す。乗越から弓折岳まで更に登り、頂上から蒲田川左俣を滑る。上部は急で雪庇がある狭い急な尾根を滑るが、雪が悪く緊張する。秩父沢の方に少し降りて回り込んで二四〇〇メートルから左俣谷に入った。雪は重いが大斜面を快適にターンして左俣谷の沢底に降りた。雪が大きく割れていて、対岸にはなかなか渡れない。雪が切れていて藪こぎを強いられしたが、水鉛谷の手前で都合良くスノーブリッジが有り左岸に渡った。左岸沿いに水鉛谷の出口に何とか着いた。

五月四日 雨後晴 夜雨強風

一二・二〇 出発

一五・〇五 水鉛谷二四二〇メートル

一六・〇〇 中崎尾根

一七・〇〇 飛驒沢二七五〇メートル

朝まだ雨が降っているのでテントの中で天気待ちをする。時間切れギリギリになったところで、出発することにした。幸運にも出発してすぐに雨

がやみ、急速に天気が良くなった。水鉛谷は両岸が雪崩で磨かれた急な岩壁でゴルジュになっている。沢底はデブリだらけで非常に歩きにくい。出来るだけ休まずに登る。中崎尾根のすぐ手前まで登ると、急に開けて傾斜のない広場のような所に出た。中崎尾根を越えて飛驒沢に入って、飛驒沢に登り、傾斜の緩そうな所を均してテントを張った。夜になって雨が降り出し、風が出てきた。

五月五日 晴風強

七・〇〇 出発 八・〇〇 飛驒乗越

八・〇〇 肩の小屋 一一・一五 槍沢ロッヂ

一六・三〇 上高地

昨夜からの風雨でフライは引き裂かれた。テントの中は水たまりができて、ろくに眠れなかった。天気は良くなるのを待って七時に出発した。出発してすぐに良くなったが、風は強かった。槍の穂先は時間が無く、パスした。槍沢はクラストしておらず、雪は重いが快適な大斜面にシユプールを描いた。雪が少なく、槍沢ロッヂで完全に滑れなくなった。後はスキーを担いで上高地までひたすら歩いた。五日間の滑降のトータルの標高差は、四二〇〇メートルであった。

カナダの

山岳ガイドたち

芳賀孝郎

昨年、夏季休暇を利用して、カナディアン・ロッキー・アルバータ峯に出かけた。アルバータ峯

は一九二五年、私の岳父三田幸夫が、榎 有恒隊長に率いられて初登頂した山である。当時も現在もカナディアン・ロッキーの中でもっとも困難な岩峯の一つである。今回のロッキー登山には、私たちの年令を考慮して、カナダの山岳ガイドを雇い、登ることにした。

私たち学生時代からの仲間九名は、カルガリー空港でガイドたちの出迎えを受けた。カナディアン・ロッキーに登りに来たお客を、彼等は心から出迎えてくれた。カナダ山岳会のクラブ・ルームのあるキャンモアまで高速道路沿いの山々の説明のサービスにも熱が入り過ぎて、運転が心配な位であった。

キャンモアのカナダ山岳会のロッジで一夜を過ごした。翌朝、ガイドたちはロッジにやって来て、早速カナダ風の朝食を嬉しそうに作ってくれた。朝食後、彼等は私たちの山の装備を点検するという。ガイドの年令を尋ねると、私がヒマラヤ登山をしたのは、彼等が生まれる三年前であると分かった。私は、彼等より長い山経験があるから、私の装備点検を彼等にしてもらう必要がないのではないかと言った。これに対して、「ここはヒマラヤではなく、カナディアンロッキーである。カナダの山岳ガイドはカナディアンロッキーについては誰よりもよく知っている。カナダで使用する装備をガイドとして点検する必要がある。」とゆつくりと、はつきり彼等は主張した。私は彼等の言い分を認めて、リュックサックから靴、アイゼン、寝袋、スパッツ、ピッケル、セーター、防寒具、雨具、アンダーウェア、サンダラスなどをすべて出して、ガイドの前に並べた。チェックの結果、

岩場での落石用としてヘルメットと、川を徒渉する時の靴を用意してもらったこととなった。カメラは二台は必要なのではないかとの忠告もあった。

ガイドの作ってくれる食事はなかなかである。朝は紅茶が出来上がると、「ティー、レディー」と大きな声がかかり、私たちは寝袋から抜け出て、テントの外に出て、朝の挨拶を交わしてティーを飲む。朝食はオートミール、パン、ハム、ソーセージといった具合である。食事は美味とは言えないが、会話や挨拶はサービスマンに満ちている。よく寝られたか、体のコンディションは如何であるか、本日の天気予報は、などと話し掛けてくる。その会話の中で、お客の体の調子を把握しているのが分かる。

キャンプ地では、ガイドが穴を掘り、モレーンを積み上げて快適なトイレを作ってくれた。使用後のペーパーはビニール袋に入れておくと、後で燃やしてくれた。テント撤収時には、トイレに砂や岩をかけてきれいにしていた。

このようなテント地での心配りもさることながら、彼等の愉快な、ひとを楽しませる話術や、ユーモアーの精神が、いかに登山を楽しめるものにしてくれたことだろう。渡渉の時、岩を登り始める時、アイゼンを付ける時など、「ちよっと集まって下さい。もつと、もつと近づいて、私の言うことが聞こえる様に。そうですね、東京の地下鉄が混んで混んで、お互いの顔と顔がくっついちゃうって聞いていますが、そのぐらいくっついて、と私たちに集まると指示するときは「ライクトウキョウ サブウェイ」が集合の合図となっていました。広大なロッキーマウンテンの岩山で、「東京の地

下鉄」を再現しながら、お互にくっつきあって、私たちは途方もなく幸せな気分になった。

川を渡渉する時はガイドが先に立ち、流れ、深さを注意深く調べる。そしてガイドが先頭に、斜めのスクラムを組んで渡った。岩場でのアンザイレ、落石に対するヘルメットの着用、岩場での足の置き方など、女性に対して、特に注意をはらっていた。雪の上では確実にキックステップを切っていた。氷河に入るとアイゼンを付ける。コンティニアスでの登行となる。ガイドを見ていると動作は全て基本通りである。更に、ガイドたちを見てみると、彼等自身の体について十分な注意をはらっていた。行動して熱くなると、すぐに服を脱いで薄着になる。休憩する時にはすぐにフリースを着る。高山での風邪をひかない基本原則をきっちり守っていた。ある時、三〇〇メートル近くで、仲間の二名が軽い高山病にかかり、調子が悪くなったので、私が彼等を連れて下山するから、他のメンバーの登山を続けてもらいたいと告げた。すると、「ガイドなしで下山させることは出来ない」「二名のガイドを一名は頂上パーティーに、もう一名は下山パーティーにと分散できない」と言うことで、結局全員で下山することになった。こんなときにも、「この日の登山はここまで、今日はここでピクニックに切り替え、ゆっくりお茶を飲んでから下りましょう。」と余裕のある対応であったことが、印象的であった。

一〇日間のカナダの山旅は、ガイドのおかげでとても楽しかった。基本を守り、誠意のある仕事ぶりに私はいつも感動した。人命を預かるガイドの、ときに厳しく、自信をもって指示する態度に

尊敬の気持ちを持った。そして何より、ガイド自身が彼等の仕事を誇りとし、愛しているから、楽しい。ガイドはサービスマンである。サービスマンを提供する人自身が楽しんでいることが、サービスマン基本である。

カナダのガイドたちは夏のガイドだけでは生活が出来ない状況である。冬のスキー指導と山スキーガイドが主な収入源である。

私も近い将来再びカナダのガイドたちと、カナディアン・ロッキーマウンテンで山スキーを楽しみたいと思っている。

お知らせ

来年はチョゴリザ登頂40周年に当たります。これを記念していろいろなイベントを考えていますが、その一つとして、次のようなバルトロ氷河トレッキングを企画しています。

- 行程 イスラマバード～スカルド～アスコレー
コンコルディア～チョゴリザの見える所
リターン→イスラマバード 24日間
- 費用 現地費用 2315ドル (概算)
- 期間 1998.8.4.～8.28. (不確定)
- 旅行社 Najir Sabir Expeditions 社 (予定)

参加ご希望の方は、希望だけでもよろしいので、平井までお知らせ下さい。なお同じ頃、月原敏博君がやはりバルトロに調査に入ります。彼とも調整して、なるべく安く、実り多いトレッキングとしたいと考えています。なお私の方では、期間などの関係で登山は考えていません。(平井一正)

エディンバラ大学滞在と パタゴニアの氷河研究

安仁屋政武

一九九六年三月下旬から十一月末日まで、学振のEOC (Center of Excellence) 派遣者としてスコットランドのエディンバラ大学地理学教室に客員研究員として滞在した。研究課題は「パタゴニアとスコットランドの氷河地形の比較研究」であった。スコットランドの田舎を巡りながら山を眺めて、過去五回調査にいったパタゴニアと比べよう、というものであった。スコットランドは最終氷期(約一・八万年前に最大)の氷床に覆われ地域全体が氷河で侵食された上、約一万五〇〇年前には標高数一〇〇メートル以上の山々は再び山岳氷河に覆われた。一方、パタゴニアは現在でも南北あわせて面積一七二〇平方キロメートルの世界で有数の大きな氷体をもつ。また、スコットランドには我々のグループ以外でパタゴニアの氷河と氷河地形を研究している地形学者のグループがいるのも、行った理由の一つである。

車を買って、いろいろな所へ調査旅行に行った。九月には英国の最高峰のベン・ネービス(一三四四メートル)に雨と視界一〇〇メートル以下の悪コンディションの中を一人で登った。雨はみぞれに近く手が凍えた。この山は海岸沿いにあり海拔二〇メートルぐらいから登るが、天気が悪くて有名である。また見事な峻峰が連なるスカイ島にも

いったが、あいにくの雨であった。

普段エディンバラにいる時は、もっぱらパタゴニアの本の執筆に当たっていた。私は幸いにも文部省国際学術科研の学術調査隊の一員として一九八三・八四(十週間)、一九八五・八六(十週間)、一九九〇(八週間)、一九九三・九四(十週間)、そして一九九六(三週間、これは私費)と、五回もパタゴニアに行くことができ、北氷原と南氷原で氷河と氷河地形を調査する機会に恵まれた。最初の二回は本会会員の中島暢太郎さんが隊長で、他に幸島司郎、(故)近藤裕史、(故)井上治郎が参加している。パタゴニア氷原は南北二つの大きな氷体からなり、パタゴニア北氷原は面積四二〇〇平方キロメートル、パタゴニア南氷原は面積一三〇〇平方キロメートルである。調査結果は四冊の英文の報告書として出版されており、論文もアメリカとイギリスの学術雑誌にいくつか発表している。南米の南端にあるパタゴニア氷原はアクセスが悪いので、我々が学術調査に入るまで、氷河の研究はほとんど行われていなかった。従って、我々の調査結果は世界で初めてというのが多く、貴重なデータとなっている。

しかし、日本で学会発表は行っているが、論文は全て英語なので日本人の目には触れることが少なく、我々の調査活動は知る人ぞ知る、である。そこで、日本語でパタゴニアのことを書くかと思いついた訳である。内容は、氷河と氷河地形といった学術的なことだけでは読者が相当限られると考え、調査地に入るための町や旅行のことなども交えて、一般の人もおもしろく読めるように企画した。幸い、文章の草稿は滞在中に書き上げ、現

在、図や写真を合わせているところである。珍しい貴重な写真が多くあるので、なんとか有効にしたいと思っている。

氷河の性質は地域によって相当異なる。そして違った性質をもつ氷河によって作られる地形も異なってくる。パタゴニアの氷河は最近急速に後退しており、氷河前面でどのような地形が形成されていくかが目の当たりに観察することができ、非常に勉強になるフィールドである。また、行く度に小型機をチャーターしてパタゴニア北氷原の周囲を飛び、溢流水河を空撮して氷河変動をモニターしている。これらは、地球温暖化が叫ばれている今日、有用なデータとなっている。

調査地はいくつかあるが、その一つはティンダル氷河で、有名なパイネ山群の奥にある。ここには、一九五七年に初登頂されてから第二登がないほど厳しい山のパイネ・グランデ(三二四八メートル)や、標高差一〇〇〇メートルを越える垂直の針峰が並ぶトールレス・デル・パイネ、観光写真で有名なパイネの角、といった技術的にも超一流であるだけではなく見るだけでもゾクゾクしそうな山々があり、ここを周回するトレッキングに人気がある。単独行は禁止されているが、一九九三年十二月に日本人が禁止を無視して入り、途中で凍死した遭難事件があった。我々が調査から降りてきた前日のことであった。下山前の四日間には天気が悪く、ベース・キャンプで六六時間の連続降雨があり、テント場は水浸しとなった後、なんと雪が(標高三四〇メートル)六時間降り積った。この気象でやられたのである。地元の新聞にも大きく取り上げられた、なんとも痛ましい事故であ

ったが、禁止を無視しての遭難だったので、われも複雑な気持ちであった。この場合、二、三人のグループであつたら、的確に対応できていたかもしれない。改めてパタゴニアの怖さを思い知らされた。またこの遭難の前日にはイギリス人が馬ごとグレイ湖に落ちて墜死している。馬がトレイルから足を踏み外したということであつた。

ところで話は変わるが、このニュースレターの試みはAACCKにとって大きな進歩だと思ふ。しかし、情報公開があちこちで叫ばれているこの頃であるから、もっとAACCKの運営等の情報を流して欲しいと思う。京都にいて執行部と親密なつながりをもった人間以外には相当不明瞭で、ほんの一部の人間が密室で動かしているとの印象が強い。ニュースレター第三号の特集「私はなぜAACCKに入らなかつたのか」を非常に面白く読んだ。そして彼らの言っていることに私自身共感することが非常に多かつた。私自身、AACCKの密室政治に嫌気がさして、会費が十倍に値上がりしたとき、除名を期待して何年か会費を払わなかつた（この時、退会規定がなかつたと聞いていたのだ）。しかし、一九八九年に中国の梅里雪山に参加させてもらったことにより、一宿一飯の恩義を感じ、滞納金を支払つて今日に至つてゐる。

遠征も登攀隊員・学術隊員は公募といいながら、選考過程は一切知らされない。初登頂を狙う山の周辺は学術的にも世界で始めての可能性が大きく、氷河と氷河地形を専門にする私にはものすごい魅力である。こんなわけで、何回か学術隊員に応募したことがあるが、多くの場合無視された。

これはおそらく、大学教官の当て馬探しの公募と同じで、最初からメンバーはほぼ決まつているが、AACCKのメンツ(?)があるから、一応会員に知らせて公募という形をとっているのではないかと、と邪推する。梅里の場合は突然降つて沸いたように話が来た。お陰で、その地域では世界で始めての仕事ができた。しかし一方では、AACCKの金権体質と相手方権力者に取り入る体質をいやという程見せつけられた。

AACCKの話をするとき、今でもなにかという今西錦司、桑原武夫その他の名前が出て、彼らの戦前の活躍から説き起す。最近はこのを読むたびに、「水戸黄門」が「葵の紋の印籠」をかざす場面とダブル。彼らの業績は業績として評価するのは当然であるが、今の時代、われわれはそれにすぎるべきではないと思う。高い未登頂の山が少なくなつてきているこの時代に呼応して、新しいAACCKを目指さなければ将来はないだろう。今年の四月に今後のAACCKをどうするかという懇談会が開かれたと聞く。ようやく執行部もAACCKの事態に目覚め、真剣(?)に危機感を感じ始めたか、という印象である。私には、今のAACCKが過去の栄光に溺れ、現実に対応できないように見える。このままアナクロニズムを引きずつて、なんの変哲もない団体(こういう表現をすること自体、過去の栄光が頭にあるということか)に落ちぶれるのもよし、変身して新しい時代を担うような登山あるいは学術登山を目指すのもよし、一度除名を覚悟(期待)した人間は、無責任にどちらでもいいと思ふ。

ラ・コンダミーンヌ 探検隊のこと

酒井敏明

昨年の夏、エクアドル・アンデスの最高峰チンボラソに登るため、この南アメリカの赤道直下の国に出かけた。九三年にキリマンジャロに登った仲間があまり参加できず、日本山岳会京都支部の人々にも声をかけてようやく二人の隊を編成することができた。AACCK会員六人が参加、そのうちの三人を含む六人が六三〇メートルの頂上に立つことができた。伊藤寿男、山本武久両氏が本誌第三号に報告を書いてくれている。

エクアドルは文字どおり赤道にまたがる国で、面積二八・四万平方キロ、人口一一二三万人の国である。国の軀幹部は東、中央、西の三本に分かれて南北走るアンデス山地がつくるシエラであるが、ほかに太平洋に臨む沿岸低地コスタ、アマゾン河源流域の大熱帯森林アマゾンがある。われわれの一〇日間の短いエクアドルの旅は、海拔二四〇〇メートル以上のシエラのほんの一部を這いずり回つただけである。しかし、一介の外国人旅行者にとっては、この国は物産はゆたか、人々はおおらかで、良い印象を覚える。

チンボラソがそびえる南のリオバンバから首都キトへ戻つた旅の最終日、夕方暮れなずむ町をあとに、北方二四キロにある赤道記念館 La Mitad del Mundo (世界の真中)をおとずれた。薄赤っぽい石造の高さ三〇メートルの四角柱の建物がそばえ立ち、頂上に金属製の地球儀が載せてある。

エクアドル政府が一九三六年ここに小さな記念碑を造り、その半世紀後に改築されて今の偉容を誇ることになった。内部は九層に分かれ、先住民インディオについてのさまざまな展示があるのだが、われわれが着いたのは閉館の時間をとくに過ぎてからだったから、薄暗闇のなか記念館と公園を見ることができただけだった。それでも、私は良い経験をしたと思っている。

実はずいぶん前から気にかかっていたことが一つあり、それはラ・コンダミーヌという探検家が一七四三年という早い時期にアマゾン河を源流から川口まで下って地図を作製しているのだ。世界探検史とかアメリカ大陸の開発を扱った地図の類には必ずこのフランス人の名を見出すのである。北アメリカならアングロサクソン人と伍して活躍した多くのフランス人探検家がいたのだから、別段不思議はないが、南アメリカではこれは稀なケースで、しかも有名なドイツの博物学者フンボルト（一八〇一―三）よりも半世紀も早いのである。私は去年チンボラソ行きにそなえて、丸善でエクアドルのガイドブックを購入した。キトやエクアドル・アンデスについて情報を仕入れているうちに、この謎が解けた。チンボラソが地球の中心から測るとエヴェレストより遠いことや、キトの近くに赤道記念館が存在することに関係することであつた。

最近、フロランス・トリストラム著、喜多迅鷹・デルマス袖紀子訳『地球を測った男たち』を読んだ。原題は『星の裁判』、女性ジャーナリストによるたいへん面白い本である。おもにこの書に依拠し、他に二、三の書を参照しながら、ラ・

コンダミーヌとかれの仲間たちの苦難の物語を紹介する。

ルイ十四世は一六六六年アカデミー・ド・シアンスを創設した。王は地球の正確な形状を知るために、パリを通る子午線の弧長を測量することをパリ天文台長J・ピカールに指示し（一六六九年）、イタリアの天文学者ドミニコ・カッシーニを招聘した。ピカールの没後、ドミニコは天文台長を継ぎ、息子のジャック、孫のセザールと三代、三〇余年にわたって「フランスをほとんど一寸刻みに測る」という大骨折りをしたのち、「地球は両極の方に長く延びているとしか考えられない」と主張した。一方イギリスのアイザック・ニュートンは一六八七年、地球は球形で両極が扁平になっているという説をたてた。フランス科学アカデミーはいずれの説が正しいかを実証により決定しようとして、北極に近いラップランドと赤道の二つの地域に、科学調査隊を派遣することになったのである。

新大陸のスペイン植民地ペルー副王領に属する赤道地方に出かけたのは一〇人のフランス人で、このうち数学者ピエール・ブーゲー（三七歳）、同じくルイ・ゴダン（三一歳）、医者で博物学者ジョゼフ・ド・ジュシュ（三二歳）、地理学者シャルル・ド・ラ・コンダミーヌ（三四歳）は学士院会員である。隊長には最年少だが、弱冠二二歳でアカデミー会員になったゴダンが任命された。ほかの六人は技師、助手など。ペルー副王領の港カルタヘナから監視役のスペイン人士官二人が加わった。

一七三五年五月フランスのラ・ロシエル港を出帆、フランス領マルチニック島で三ヶ月半滞在、

パナマから別の便船で太平洋を南へ向かったのは翌三六年二月末である。三月一日マントタ港到着、キト到着は五月二二日である。スペインが支配する新大陸ではフランスの学者たちは移動の手段を自由にもたず、また、ここではヨーロッパとは違って、時間がきわめてゆっくりとしか流れないことを早々に知らされた。

若い隊長ゴダンはすでにマルチニック島の船待ちのあいだに混血の美女にのぼせてしまい、隊の資金に手をつけて愛人に貢いでしまう不行跡、派手好きで浪費家であり、隊の運営よりも私事を優先する。統率者としてはこの上もなく不適格であることがわかった。他の隊員もさそりにさされたり、黄熱病にかかったりで、隊員の志気もばつとしない。スペイン当局は外交儀礼上表だって反対できずに遠征隊に許可証は発行したけれど、自国植民地内でフランス人科学者たちが活動することには厳しい制限を課した。在リマのペルー副王も在キトの総督も、隊に対して特別の便宜を図ることに関心を示さなかったから、この科学調査隊には初めから様々の困難がつきまといつた。

キト東方の平原に全長約一三キロの基線を設定し、三角測量と天体測量で子午線一度に相当する地表面の距離を測定するこの事業には、多大の労力と日数とを必要とした。ちなみに、インディオたちは労働力提供の意味ではほとんど役立つところはなかった。ブーゲーとラ・コンダミーヌが組み、ゴダンはスペイン人士官を助手として、二組みの測量班が作業をし、時々結果を照合しあう方法が当初はおこなわれたが、途中からゴダンは相互点検を拒否した。地表の測量が終了してからも、

毎日毎日星を観測する仕事が三年ほど続く。どうやら一七四三年三月までにはほとんどの作業は終わり、緯度にして二度にわたる約五〇〇平方キロの調査が完了した。

慣れない高所における生活と精神的肉体的衰弱、しばしば起こる地震、敵対的なスペイン当局者、友好的だが知的関心をほとんど示さないクリオリヨ社会、隊の資金を一人で管理するゴダン隊長の浪費癖、隊員間の感情のもつれなど、とくに隊は有機的な結合体ではなくなっていた。パリに手紙を書いても、往信と復信に一五ヶ月を要し、また必ず届くという保証はなかった。四人のアカデミー会員は規則上隊の業務以外に従事することを許されていなかったが、作業が予定をはるかに越えて長引いたので（事実ラップランド調査隊は何年も前に帰国していた）、科学アカデミーは助手たちに対する費用は打ち切ると通告していた。助手のうち一人はすでに三七年キトに到着まもなくで黄熱病で死亡、他の一人は三九年に現地資産家の娘の色恋沙汰にまきこまれ、クリオリヨに刺殺される悲運に遭った。残る四人の助手たちは現地社会で、外科医、技師などの腕を生かして自活せねばならなかった。

不足する費用に当てるため私物の衣類その他を売却したことが許可証の条項に違反するとして、ラ・コンダミーヌは裁判にかけられ、また、刺殺事件でも裁判所に呼び出されるなど、リマへ足を運ぶなどして、観測は遅れ、ペルー滞在は長引いた。帰国の費用を捻出するため、観測用器具を売却したり、質入れする必要もあった。

四人の学術隊員の帰国の時期と経路をみても、

ばらばらである。数学者ブーゲーは四三年二月二〇日キトを立ち、陸路牛にゆられてカルタヘナに到着、四四年六月パリに帰還した。かれは最初に帰国した隊員として、探検隊の諸成果を公式に発表する栄誉に輝いた。このことはゴダンが最も恐れていたことだ。

ラ・コンダミーヌは四三年五月現地隊員ベードロに誘われてアマゾン河を下ることに決める。同行する筈の技師モランヴィルは合流予定のラグナに現れない。数週間前にキトを出発したことはわかったが、途中で消息がわからなくなったのだ。やむを得ず、二人はカヌーでアマゾン河を下り、地図作製、動植物の調査などをしながら、苦難の旅を続けた。マナウスまで来ると、ここにはポルトガルの外航船も遡上していて、文明の世界につながっていた。九月二七日パラに着き、便船を求めてフランス領ギアナのカイエヌヌへまわり、四四年一月末アムステルダムに着いた。

ゴダンはリマの大学で数学教授の職につき、また、新聞記者としても活躍していたが、一七四六年ジュシユーとともに帰国準備をしていたとき、一〇月二八日大地震にまきこまれた。リマ市の復興に尽力するなど、滞在が延びた。四八年八月二人でブラジル經由大西洋岸に出ようとしたが、ラパスでジュシユーは別行動を取ってポトシ經由リマに戻り、ゴダンは独りでリオデジャネイロに出た。無一文になったゴダンは嘆願の手紙を出してもフランスから救いの手は差しのべられず、やつと二年後リスボン行きの船に乗ることができた。ポルトガル政府の意向で到着直後スペインに送られ、先に帰国していた監視係りの二士官の世話で

会 務 報 告

理事会（一九九七年六月二九日（日）
一三時～一六時、京大会館）

出席：上尾会長、田中・森本副会長、新井、原田、上田、横山、松林、牛田、伊藤、山田、清水各理事、山口監事

委任：岩瀬、西山、松沢、吹田、竹田

議事：本年度事業計画の具体策について

一、国際登山探検文献センター図書目録の電子化を進める（清水担当）

二、チヨゴリザ初登頂四〇周年記念事業準備委員会を設ける（委員長に平井会員）

三、山行計画等企画委員会を設け、インターネット掲示板・ホームページ開設を検討する（寺本会員、森本、原田、岩瀬担当）

四、笹ヶ峰ヒュッテ修繕・改築等について京大山岳部に協力する（田中、新井、原田、横山担当）

五、第三次梅里雪山隊の報告はAACK時報で知らせることを検討し、その他残務処理等は隊が責任をもつて進める（松林担当）

六、Zemaitisの編集（酒井編集委員長）、発行を進める。関東地区でも「AACKの今後を語る会」を開催する（森本担当）
次回発行は8月を予定。

七、全国山岳スキー安全セミナー（九月二八日京都開催）を後援する（山田担当）

八、事務局常駐体制については上記の進行具合に応じて検討する。

九、その他、新人勧誘、会費納入の督促を推進する。

カデイス士官学校の数学教師の職を得た。フランスへの帰国は許可されなかった。

リマに残ったジュシユーは度々病魔におそわれ、精神的にも衰弱して記憶喪失の老人としてキトの友人たちの世話を受けていたが、とうとうパナマ行きの船に乗せられ、七一年六月、出発後三年にしてようやく祖国の土を踏んだ。

ブーゲーとラ・コンダミーヌが持つて帰った測量データは、ラップランド遠征隊のデータと、カッシーニ家が三代にわたって集めたデータとつきあわせると、地球の姿を決定できると期待されていたが、赤道一度の弧長が測量できなかったためもあって、大きな貢献をすることにはならなかった。しかし、一行が持つて帰った測量結果はきわめて正確であった。一九二四年国際測地学協会が得た赤道直下の緯度一度の弧長一一〇・五七六キ

ロに対し、ブーゲーは一一〇・五九八キロの数値を得ていた。遠征隊が使用した機器の不完全なことから、かれらが出会った不利な状況を考慮すると、アカデミー会員たちは例外的なほど厳密な測定をしたと評価される。

赤道記念館の前庭には探検隊員十三人の胸像が並んでいる。フランス人九人、スペイン人二人、エクアドル人二人である。ゴダンは形式的には最後まで隊長であったが、母国への入国を認められず、スペインで没した。ラ・コンダミーヌがエクアドル人ペードロ・マルドナドといっしょに作ったアマゾン河上流の地図は、今世紀に入るまで訂正を要さず使用できたという。測量事業の実際をとりしきったラ・コンダミーヌが隊長として後世に名を留める所以であろうか。

お知らせ 京大創立百周年記念展「知的生産の伝統と未来」(京大総合博物館、10月28日～11月24日)に“登山・探検とフィールド調査”が出展されます。

編集後記

カラコラムのスキルブルム峰に登頂した神奈川ヒマラヤ登山隊の遭難事故が報ぜられた。ベイスキャンプで就寝中、巨大氷塊の崩壊でおきた雪崩による爆風がテント群を襲ったという。雪崩が落ちた谷との間には尾根があり、キャンプサイトは安全と見られていた。午前一時半という深夜に発生した巨大雪崩ということでは、九一年一月の梅里雪山第三キャンプの場合と符合する点がある。

AACKは役員トップの交代があり、新たな気持ちで会の運営がおこなわれる。会員諸氏も要望や意見をどしどし理事会に伝えられるのが良いし、本誌も投稿を首を長くして待ち望んでいる。登高の記録、研究、紹介、論評、意見など、窓口は広く開かれているのである。

この号には新会長の抱負の弁と報告三編を掲載することができた。あとの一編が長く、次号に送ることを余儀なくされ、やむを得ず、ページを埋める拙稿を作った。事情を諒とされたい。次号の投稿締切は十月二十日です。(酒井記)

編集委員 平井一正、酒井敏明、薬師義美

発行日 一九九七年八月三〇日

発行所 京都大学学士山岳会

京都市左京区北白川追分町

京都大学大学院農学研究科

地域環境科学専攻

清水 浩 気付

製作 京都市北区小山西花池町一一八

(株)土倉事務所